The Doll with Red Dress

昭和３０年代前半　まだ小学校に上がる前、我が家は戦前からあったような木造平屋建ての　隣の家と屋根を共有する長屋形式の借家だった。

軒下につるしたスダレ（もちろん夏の間だけだが）をはねあげ、縦長の格子にガラスの入った引き戸を開けると半畳ほどの土間の玄関だった。右側の下駄箱の上の父親がリンゴ箱を解体して作り直した鳥小屋には、雛が生まれたり猫やねずみに殺されたりして増減を繰り返しながらも、いつも５～６羽のカナリヤがいた。靴を脱いで上がりがまちに上がり、真ん中に一枚だけガラスの入った障子戸をあけると、畳敷きの４畳半の部屋で　突き当りと左側がふすまの引き戸になっていた。突き当りのふすまを開けると２坪ほどの板敷きの台所で、右奥に便所（もちろん汲み取り式だ)、左奥には裏へ抜ける勝手口があった。４畳半の左のふすまを開けると、リビング兼ダイニング兼寝室の　半畳ほどの押入れと床の間のついた畳敷きの六畳間だった。家財道具はといえば、４畳半の部屋には座机と小ぶりのタンスそして水屋、六畳の部屋には、その上に我が家唯一の電化製品のラジオと、僕の初節句のお祝いに祖母がくれたという我が家とは不釣合いにおおきなガラスケースに入った金太郎の人形（なぜか自分の背丈ほどもある真っ赤な鯉を釣り上げている）を乗せたタンスと、服を洋服賭けに吊るしたまま入れる形式の洋服ダンス（父親に怒られたときによく閉じ込められた）と、母親の鏡台、そして台所に木の冷蔵庫（そう夏の間だけ氷を入れて使うやつだ）ぐらいだったように記憶している。何しろ家電製品などというものはまだ一般庶民の家などには普及しておらず（少なくとも近所の家では見たことはなかった)、もちろん我が家にも何もなかった。

そんな何もないような我が家で、六畳間の鴨居の高さには父親手造りの棚が一間分ほど取り付けてあり、その上には我が家で唯一文化的な香りのする「平凡社世界名作全集」が並べられていた。上下を白と黒に塗り分け、黒地に白抜きの文字で題名の入った背表紙の外箱が並べられていた。何の娯楽もなかった当時、読書好きだった母親の唯一の楽しみだったということだろう。その名作全集の並べられた棚の上方には、講道館柔道四段という額と、父親の生まれ育った瀬戸内の島々を写した白黒の風景写真と、なんとなく父親に似た日本海軍のセーラー服を着た見知らぬ人物のセピア色？の写真が額に入れて吊るしてあった。それは誰なのか、なぜか聞いてはいけないような気がして聞けず、新しい家になりその写真も飾られなくなり、結局直接聞く機会もなかったが、酔ったときの父親の話を総合すると、１１人兄弟の８男だった父親の一番仲のよかった戦死してしまったすぐ上の兄ということらしかった。

その赤い服の人形は、会うこともなく死んでしまった伯父さんの写真と、柱時計（毎晩父親が寝る前にいつもぜんまいを巻いていた）に挟まれるように、「世界名作全集」の上にいつも座っていた。それは何の変哲もない赤い服に赤い帽子の女の子のぬいぐるみの人形で、当時の小さい女の子なら誰でもひとつは持っているようなものだった。僕はその人形には、時々　思いついたように柔道の相手をさせて投げ飛ばしたりして、今にも取れそう

な手足の付け根から、詰め物の木毛のはみ出していたような記憶しかないのだが、母親などの話では、僕の記憶の以前の世界では、その赤い服の人形をいたく気に入っていて、よく連れ歩いて遊んでいたらしい。確かに　当時大流行したダッコチャン人形などを欲しがり買ってもらった記憶があり、人形やその類が子供のころから好きだったのかもしれない。それ以後人形を買ったり集めたりしたことはないのだが、今でも人形を見ると興味や関心が向くのは、記憶の以前の世界で遊んだその名前もない赤い服の人形とのことが、今でも心のどこかに残っているということなのかもしれない。

　その赤い服の人形は、僕が小学校に上がり全く見向きもしなくなってからもしばらくは、「世界名作全集」の上に座り僕を毎日見下ろしていたような記憶もあるのだが、その後の行方はわからなくなってしまった。しかし　今でもその赤い服の人形は、棚の「世界名作全集」の上に、見下ろすように僕の記憶の中で座り続けている。